

# 家族の絆戦争で強く

## 文人の 武蔵野

詩人を親にもつとはどうい  
うことなのでしょう。リス  
ペクトしつつも、周囲との関  
係に苦慮する人生を業とする  
のでしうか。

金子光晴という詩人を父に  
もち、森三三代という作家を  
母にもち、自身はフランス文  
学研究の道に進んだ森乾（1

### 金子光晴 ⑨



光晴とともに「玉川上水を守  
る会」で活動した野田宇太郎

925〜2000年）。詩集  
「三人」で「ボコ」と呼ばれ、  
「盗まれたらかへのないたつ  
た一人きりのボコ」は「父親」  
に溺愛されました。戦時中  
は父の工作により召集を逃れ  
させられた乾は不正義を感じ

てうしろめたさに打ちひしが  
れます。

父と母は、結婚と離婚を繰  
り返し、それぞれ配偶者とは  
異なる異性たちと浮き名を流  
しました。父の相手の多くは  
書籍の中に書かれており、母  
の相手の多くは文学史に残る  
人物でした。「何度も家をつく  
り、それをこわしてきた」光晴  
は、「物は、一人の人間のめぐ  
りにあつまって、或いは、かた  
わらをすりぬけて、切られた  
せきとともに我を争ってなが  
れ去る。人間同士の愛着もそ  
うだ」と自伝で述べています。

移ってから戦争中のほぼ十年  
ほどのあいだほど、僕らの家  
が結束していたことはない。  
それは、後にも前にもなかつ  
たほどだと言ってもいい。人  
間は苦難でのみむすびつくも  
のなのかもしれない」と吐露  
しているように、疎開生活を  
挟んだ「三人」の「十年」は  
強い絆と愛に溢れた例外的な  
時期でした。

それぞれ互いをリスペクト  
する個の組み合わせが「三  
人」の存在と表現を構成しま  
す。家族の十年は、「戦争が  
すんだらと三人はいふ。／だ  
が戦争で取上られた十年は、  
／どこへいつてもどうしても  
とりかへ／されないのだ。」

とも詠まれる十年でした。  
それから20年以上経った1  
966年4月、近所の作家で  
ある田宮虎彦や野田宇太郎ら  
とともに「玉川上水を守る会」  
の世話人になりました。上水  
を埋める計画に反対したの  
で。本人は嫌がるかもしれま  
せんが、武蔵野の文化人と  
も呼び得るような一面もあ  
ったのでした。

（武蔵野大教授、むさし野  
文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オ  
ンラインでお読みい  
ただけます。スマー  
トフォンはQRコー  
ドから。